

2009年04月08日-171-参
-少子高齢化・共生社会に関する調査会-4号-

○石井みどり君 本日は、四人の参考人の方々に、本当に現場に密着した生々しいお声をお聞かせいただいたことに感謝を申し上げたいと存じます。最初の鈴木参考人とそれから桑野参考人の言葉が期せずして一致した。地域ブランドは風景を残すことという、風景を残すというところはやっぱりキーワードだなという気がしてお聞かせいただきました。私は、鈴木参考人と石垣参考人にちょっと御質問をさせていただきたい。今の那谷屋委員の御質問とちょっと重複するかと思いますが、本当に随分な御苦労の中で、特に石垣参考人に関しては、ここまで直売所の運営を続けてこられた。途中で大変な、公的事業というところでは挫折をされた、農業経営者の方々の反対に遭った。となると、地域で、よく昔は本当に非常に農家は保守的で封建的であった。女は黙っているみたいなのところがあった。そして、そういう反対があったら本当にひょっとしたら挫折をされたかもしれない。しかし、農村女性のすばらしいところは粘りである、それから団結力であるという、それで乗り越えてこられたのかなというふうに思いますが、それでもやはり地域社会、非常に保守的な中でそれを乗り越えて、さらに事業に発展させてこられた、うまくリースという形に持っていかれた。やっぱり人間関係の作り方が一番難しいのではないかと思います。そこで一番のキーというか、何が解決になるかというのをお聞かせいただきたいと思います。それからもう一つ、今からは地産地消で食育というところで学校にもかかわっていかれる、学校給食の食材提供ということで大きくかかわられたわけですが、その食材の提供のときに、そこに子供たちも、農村の子たちも結構いらっしゃると思うんですね。その生産物を作るというところにかかわることによってやはり農業の魅力、楽しさ、もちろん苦労も一緒に伝承していける。そのことがやはり後継者育成につながる。同時に、やはりその魅力を発信していったって、昔はよく農家の娘は農家へ嫁がないということをやられた。しかし、農家の娘が農家へ嫁ぐようなそういう形での、四人のお孫さんがどうなるのか分かりませんが、そういうところの、どうしていけば後継者へつながるか。さっき、給料が払っていけるというような、そういう農業の形態によっても随分違ってくると思うんですけども、その辺をお聞かせいただきたいと思います。それから、最初にお話しいただいた鈴木参考人は非常にやはり全国の様々な事例を御覧になっていて、非常にそれをオーソライズされた今日は御意見をお聞かせいただきました。私はいつも思っておりますのは、ローカルであればあるほどグローバルであると思っています。これは、オリジナリティーというのは、鈴木参考人のお話の中に、小さな差を本当に見付けていく、それこそが

オリジナル、オリジナリティーを見付けることだろうと思うんですが、それぞれの地域にやはりオリジナリティーがある。しかしながら、今あちこちからいろんな、例え平成21年4月8日 少子共生-23-ば果物を送っていただいたら、その生産者の方の家族の写真が入っていたり、今度からは直にオーダーをしてくださいというのが入っている。かなり似通ってきているんですね、全国が。似通ってきているけれども、それぞれオリジナリティーもある。そのところのノウハウをどううまくそういう経営につなげていくというところを、私はやっぱりネットワークづくりとアドバイザーが必要だろうと思う。これはやはり鈴木先生のような方だろうと思うんですが、もう一つ、行政の役割が、行政主導では困るけれども、行政こそがコーディネーターでなくてはいけないのではないかと考えているんですが、その辺りをお教えいただければと思います。以上です。

○参考人（石垣一子君） 反対されたときに乗り越えたのは、自分たちがどうありたいかという、自分の農業経営が今頑張らなければ生き残っていけないという意識の下で頑張りました。というのは、反対陳情を出された男性七名というのは、私たちの集落の七名の個人の直売所を持っている人方が、公の事業を導入すると個人で頑張ってきた人が消されるというふうな反対陳情でした。テーブルをたたいて、台風十九号より、おまえが嫁に来てから大きいもめ事を起こすと言われましたけれども、その中に主人もおりましたので、このことはうちの主人がそう言ったのではなくて、大変つらい思いをさせて私を認めてくれたということで、ここはどんな反対があっても一歩を踏み出さなければ、次に女性の声がまた消されるという思いで頑張りました。それから、学校給食のことですけれども、ここで発表しますと聞こえは良く、五千九百食分、直売所が地元の野菜を使っているかといいますと、今現在使っているのが一〇〇%だとすれば、地元の野菜は二〇%という現状です。ですから、今、来る前にですけれども、市議の方々に話を申し込みまして、農政議員と語る会を持ちまして、もっともっと地場の農産物を使ってもらえるように運動を進めていかなければならないと思って頑張っております。なぜ地産地消と食育を進めていくかといいますと、やはり自分たちの子供は自分たちの作った安全で安心して食べられる野菜を食べてもらって育っていくことにより、例えば東京に出てきても、ああ、あの母さんの作った野菜を食べたいなというふうに秋田へ戻ってくるんじゃないかなというふうな思いを込めまして、頑張って取り組んでいかなければならないと思います。そして、大館も都会と負けず劣らずということで、給食費を払わないお母さん方もおります。ですから、農家の私たちだけが安く提供するのではなくて、きちんとした生活のできる価格で提供しながら同じ痛みを

分け合うということをしていってもらえるんじゃないかなということで、食育の部分でも協力して進めていきたいなと考えております。

○石井みどり君 後継者の養成というか、後継者へつなげるというところはいかがでしょうか。

○参考人（石垣一子君） 今、意識を持って私たちが技術でも何でも伝授されないと、もう伝わっていかないんです、黙ってては。ですから、私たちも意識を持って子供たちを、農村の子供だからといって農業に携わる機会は少ないので、都市だけではなくて農村の子供たちも農家で一緒に農業体験をしていただきながら、自然とお金をはかりに掛けるわけじゃないんだけど、お金だけで自分の職業を選ぶんじゃないよというんですか、心を豊かにしなければ生きていく上で大変なんだよというんですか、そういうことをも感じてもらえれば、農業後継者も命を守っていく産業に携わるんだという使命感みたいなものを農業体験で感じてもらえればなあなんというふうに思っております。

○石井みどり君 ありがとうございます。若い人が生きていける地域にする、そして農家のお子さんが、やっぱり技術が要るわけですから、平成21年4月8日 少子共生-24-農業をするというのは、継ぐというか、それから、それ以外の方も学んでいくというのが……

○会長（田名部匡省君） 発言を求めてから。速記取っていますから、やり取りすると、だれがしゃべって、何やったか分からなくなりますから、発言を求めてから。

○石井みどり君 やはり農家のお子さんが継ぐというのが一番本当は自然ですけれども、それだけではなく、やっぱり技術を伝えていくというのを外からも、もちろん団塊の世代の方がリタイアしてやるのも一つですけれども、今農業に魅力を感じている若い人もいますから、そういう方々もこれから引き込んで、是非更に陽気な母さんが増えることを期待をしております。ありがとうございました。そうしたら、鈴木参考人の方にお答えをお願いしたいと思います。

○参考人（鈴木輝隆君） 一つは、行政の役割からいいますと、行政の役割、コーディネーターはそのとおりだと思います。それはどういうことかといったら、私はローカルデザイン研究会というのを毎月一回東京でやっています、社会人と学生と一緒に学ぶということで、学生が受付、司会とか記録をやったりし

ているんですね。それは、大学という社会も狭い、それから地域という社会も狭い、自分の住んでいる世界が狭いけど、理解できないかもしれないけど違った価値観の人に会うということの場が余りにも少ないと。ローカルに行けば行くほど社交の場がなくて同じ人が集まるんですね。だから、そうじゃなくて、全く違った価値観、理解できないかもしれないけど、そういう人たちとどうやっていくかということをする場をつくっていくのは、僕は行政マンが必要だと思います。デザインの話で先ほど、地域ブランドの話なんですが、今デザインというものに関しては、都会が産業には利用しているけど、実際には農業とかコミュニティにデザインって入ってないんですね。だから、ほとんどデザインというのは産業界だけに寄与していると。デザインというものを考える方がなかったんです。地域ブランドというのは、おしゃれでないとブランドにならないんです。それは、デパートの地下とかいいスーパーに行ってみますと、フランスとかドイツとかイタリアとかイギリスの食品のところに日本の手作りの商品持っていても売れないんです。ですから、今お手伝いしたりしているのは、アートチャレンジ滝川というところでやっているのは、デザインとローカル、デザインと農業とか、そういうことをもう考えていかないと生きていけない。例えば、北海道の中札内というところでキャベツを、去年も夏に行きますと、八つぐらい段ボールに入れて、それで出して四百円、五百円なんですよ。朝四時ぐらいから起きて、それを八百個作るんですね。八百個だから六千四百個もキャベツを取って、それだけ出してもそれだけの金。そこがちょっと農業の加工品とか、そういうものを娘さんがやり始めたら一千万ぐらい行ったんですよ。でも、それを手作りでやると、インクジェットだと、冷凍にしてしまうとバーコードが通らないと。そういうものをデザインすることをお手伝いしていこう。だから、通年商品を持ち、魅力あるデザインをしてあげるといってお手伝いをするようなことをしていこうということを思っているわけですね。昨年の八月にデザイン物産展ニッポンというのを銀座のデパートでやったんです。今まで物産展というのは若い人が来なかったんです。だけど、デザイン物産展といたら若い人が来て、物すごかったんです。地域の食品であるとか伝統的なものにデザインを入れたら、それを若い人が欲しい。若い人というのは、やっぱりおしゃれなもの、そういうものに対して、その品質とか、そしてオリジナリティを評価していくんですね。振り向いたから、こういうことをまた続けていきたいという話があったんです。この私の中にも、農山村をローカルデザイン力平成21年4月8日 少子共生-25-で再生するというのを、デザイン物産展ニッポンというところでデザインというものを農業に入れていく。だから、農家で作ったものにメッセージを付けて、それを売っていくとオリジナリティや品質を評価してくれる。ローカルで品質を評価されたローカルデザイ

ンというものを世界が認めると、グローバルデザインになっていく。そうやって世界に買ってもらうと、世界の人が日本の農村地を守ってくれると。そこまでやっていけたらなというふうに思っています。

○石井みどり君 ありがとうございました。 —